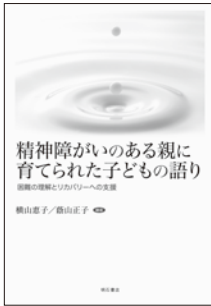


■ 書 評



精神障がいのある親に
育てられた子どもの語り
—困難の理解とリカバリー
への支援—

横山恵子, 蔭山正子 編著
明石書店
2017年12月 224頁
本体価格 2,500円+税

本書は、精神障がいをもつ親に育てられ成人した子どもの事例を通して当事者の困難さの実際を紹介している。そして、ライフサイクル（乳幼児期から成人期にかけて）に基づく体験（困難さとリカバリー）について整理した後、そのような子どもへの支援のあり方について関係諸機関（母子保健・児童相談所・精神医療・保育園・学校・生活保護など）の連携の必要性や今後の展望について論じている。編者は、精神障がい者の家族支援などを主な研究テーマとする看護学専門の大学教員である。平易にまとめてあり、多職種の支援者だけでなく、当事者にも有用である。

今さら本誌で述べるまでもないが、戦後、1950年に精神障がい者に適切な医療・保護の機会を提供するための保健医療施策を内容とする精神衛生法が成立し、以後精神病床数は急増した。1987年には、精神障がい者の人権に配慮した適正な医療および保護の確保と精神障がい者の社会復帰の促進を図る観点から精神衛生法の改正が行われ、名称も精神保健法へと改められ、1995年には、精神保健法から精神保健及び精神障害者福祉に関する法律へと改正され、「自立と社会参加の促進のための援助」という福祉の要素が位置づけられた。この20数年の間にも精神医療は大きく変わり、入院患者が減少する一方、統合失調症以外の精神疾患の外来患者が急増した。子どもを持つ精神疾患患者数は把握されていないが、統合失調症圏の精神科通院女性患者の3~4割に出産経験があるとの報告もあり、統合失調症以外の疾患や精神科未受診例も含めれば、実数はさらに多いであろう。

本書の半分近くは精神障がいをもつ親に育て

られ成人した子どもの体験が語られている。その前半は主に精神衛生法時代の精神医療につながらない親に育てられた40~50歳の成人3人、後半は主に精神福祉法以後の精神医療につながった親に育てられた20~30歳代の成人6人の事例である。親の精神疾患は、親の育児困難・離婚・失職・貧困などさまざまな問題と関連し、その後不安や自己肯定感の低下、孤立感などさまざまな精神保健上の問題をもたらす。その後の発達や生活に生涯にわたり大きな影響を与える。最近では、インターネットを介した情報発信も容易になり、精神疾患をもつ親に育てられたケースの報告は増えるであろうが、精神疾患は疾患異種性が高く、抱える問題は多様であろう。このような子どもが成人し親になり子どもを育てるという当たり前の希望を安心して実現するためにも、さまざまなケースに対応可能な多職種地域連携に基づく支援体制整備が重要である。

精神障がいをもつ親に育てられた子どもの問題が注目されたのは、この10年ほどのことである。2008年に統合失調症をもつ母との生活をまとめたコミックエッセーが出版され、その後、数名の精神科医が母親の精神障がいを発表し、注目を集めた。2009年には三重県で『親&子どものサポートを考える会』が、精神疾患をもつ親とその子どもが支援を求めやすくするための活動を開始し、同様の取り組みは少しずつ全国に広がり、本書の出版もそのような取り組みの1つがきっかけになっているが、支援方法は必ずしも確立されたものではない。精神疾患の有病率からすると、本学会17,000名超の会員の中にも精神疾患をもつ親に育てられた方が相当数いると考えられるが、家庭内力動やスティグマ、個人情報保護など配慮すべきさまざまな問題のために公表できない方も多いであろう。そのような会員を含め、多くの精神科医がこのような取り組みに少しでも理解と協力を示していただくことが、今後の精神医療を発展させ、精神障がいの克服につながることを期待する。

(高橋秀俊)